

視 点

子どもの COVID-19対応

～病弱教育の視点からのアプローチ～

副 島 賢 和

I. はじめに

病気を抱えながら生活をしている子どもたち(以下、病気療養児)に対して、国は教育を保障している。そのため、病院の中にある学校や学級(院内学級)等で病弱教育が行われている。病弱教育とは、入院治療が必要となった子どもや、継続して医療を必要とする子どもを対象とする教育である¹⁾。

平成6年12月に文部省(現 文部科学省)より出された病気療養児の教育の意義においては、以前から病弱教育の目標とされている「学習の遅れなどを補完し、学力を補償する」に加えて、「積極性・自主性・社会性の涵養」、「心理的安定への寄与」、「病気に対する自己管理能力」、「治療上の効果等」が明記され、病気療養児に対する教育の必要性が述べられている。また、特別支援学校に在学している病気療養児への教育目標と小学校・中学校等に在学している教育目標は同じであるが、個々の子どもの教育的ニーズに対応するために小学校・中学校等の領域・教科に加えて、自立活動の領域が設けられている。子どもたち一人ひとりが自立を目指し、病気の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度および習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うことが目標とされている。自立活動の内容の5つの区分は、「健康の保持」、「心理的な安定」、「環境の把握」、「身体の動き」、「コミュニケーション」である。

病弱教育に携わる教員は、これらのことを念頭に置き、医療者と協力をしながら、入院・加療中の病気療

養児の教育の保障、いわゆる病弱教育を行ってきた。このコロナ禍の状況においても、子どもの学びを止めないよう取り組んできたが、感染防止等の配慮や対面での関わりができないときの授業などは、病弱教育の領域においては今までも行われてきたことである。このような病弱教育における知見が、コロナ禍における子どもたちへの対応のヒントになると考えた。そこで本稿では、病弱教育の視点からの具体的な取り組みを紹介し、これからの子どもたちへの対応を考える一助としたい。

II. 子どもの力を回復する関わり

小学2年生の男の子が教えてくれた言葉がある。

しあわせ

すきなものが
たべれるといい
すきなあそびが
できるといい
お母さんと
ずっといられるといい
ともだちが
いっぱいできるといい
いっつも
あさだといい
そうだったらいい
そうだったらいい

「好きな遊びができるといい」と教えてくれた。入院中の子どもたちが苦手なものの一つに「ひま」があ

る。それは、時間がたくさんあると、さまざまなことを考えてしまうからである。友だちのこと、学校のこと、きょうだいのこと、家族のこと、治療のこと、将来のことなど、心の痛みを味わうことが嫌なので、ゲームの世界に没頭していることがある。漫画や雑誌をパラパラとめくっている子どもも多い。手術の痕が痛いなど身体の痛みもつらいため、幼い子どもも折り紙やぬり絵をやり続けている姿がある。

この様子は、コロナ禍の状況にいる子どもたちにも似たような姿がみられる。学校が休校になったり、外に出かけることを自粛するよう求められたりした子どもたちが、家でゲームやYouTubeばかりして、学校は宿題を出すなどその対応を求められることがあったりしたが、果たして子どもたちはゲームをやりたくてやっていたのだろうか考える。病気療養児のことを思い浮かべると、家にいる子どもたちも、ひまな時間を潰すために、つらさを感じないようにするために、ゲームやYouTubeに取り組んでいたのではないかと想像する。

そんな子どもたちとの関わりで大切にしていることは、その子どもにとっての「楽しい時間」を用意していくことである。「せっかく入院したのだから」と伝え、何を言っているのかという眼差しで筆者の顔を見る子どももいる。しかし、「せっかく会えたでしょう」、「せっかくこの教室に来てくれたのだから」、「今しかできないことをしよう」、「ここだからできることをしよう」、「一緒に考えよう」という筆者の言葉で、考えを変えてくれる子どもは多い。

入院・加療中の子どもたちは、患者であること、すなわち、受け身の存在であることを求められる。大人の言うことに従い、治療に専念して、周りに迷惑をかけずに過ごすことを求められるのである²⁾。しかし、入院・加療中であつたとしても、多くの子どもたちにとっての治療の時間は、ごくわずかである。それ以外の時間はひまになる。だからこそ、子どもたちが、患者から子どもに戻る時間や空間を保障する関わりを大切にすること。本来、入院は子どもたちにとって、非日常のことであるが、治療のために病院で患者として過ごしていると、その状態が子どもたちの日常となっていく。そこで、その子にとっての日常を一緒に探して取り組むようにする。その子にとって、学習をすることが日常であつたら、楽器を弾くことが日常であつたら、

本を読むことが日常であつたら、絵を描くことが、おしゃべりすることが、お散歩することが、歌を歌うことが日常であつたら、どんな短い時間でも、いつものように「さあ、やろうか」という時間を確保していく。

「お母さんとずっといられるといい」と教えてくれた。コロナ禍以前でも、治療や感染予防のために、面会が制限されている子どもたちがいた。家族や大切な人との時間は、治療やつらさに向き合うためのエネルギーとなる。現在、筆者の関わる病院では、入院中の子どもたちへの面会は、1時間以内、1人までである。これでは、子どもたちにエネルギーはたまらない。甘えん坊の子どもたちや戦いモードの子どもたちが増えている印象がある。病棟にいる就学前の幼い子どもたちだけでなく、教室に来てくれている中学生にもこの姿がみられる。

そんな子どもたちへの関わりで大切にしていることは、今を大切にすることである。人は、今を大切に味わっているときにエネルギーがたまると考えている。大人もつらいことがあったときに、美味しいものを食べたり、友人とおしゃべりをしたり、音楽を聴いたり、映画を観たりと今を味わうことで、次の日へのエネルギーをためているのではないだろうか。特に子どもは、今を生きている存在である。だから水溜まりがあつたら入ろうとするし、きれいな虫がいたらしゃがみこんでじっと見ているのである。そのときに子どもはエネルギーがたまる。しかし、入院・加療中は、たくさんの制限があり、治ることや退院するといった先のために、受け身であることや今の行動を決めることを求められる。それを行うためにも、その子の今を大切にすることを取り組みを行う。子どもが食事中に美味しいという表情をしていたら「美味しいね。」と伝える。空がきれいだなという表情をしていたら「今日は空がきれいだね。」と伝える。薬が苦いという表情をしたら「その薬は苦いんだね。」と伝える。注射が痛いという表情をしていたら「痛いよね。」と伝える。あなたが感じている感情や身体感覚の間違っていない、大切に持っていいというメッセージを渡す。教室でも学習や遊びの関わりをとおして、そのような取り組みを行っていく。子どもたちが、自分の感情や感覚を肯定されていくことで、自尊感情を育む活動を行う。このことは、コロナ禍の状況で、我慢や頑張りを求められている子どもたちにも必要な関わりで

あると考えている。

子どもが病気や怪我で入院をするということは、家族の一大事である。そのようなときは、普段は水面下に置き、子どもに伝えないようにしていたことが顔を出してくる。例えば、ご夫婦の仲だったり、ご家族や親戚との関係だったり、家庭の経済状況などが、子どもにも伝わる。「最近、お父さんとお母さん、けんかしてるみたい。一緒にお見舞い来てくれない。」と教えてくれた子どもがいた。それをその子は、病気になった自分のせいだと自責の念を抱き、年齢以上の我慢や頑張りをしている姿がみられる。このことは、コロナ禍の状況の子どもたちにもみられるのではないだろうか。大人が我慢し頑張っている姿を見ている子どもたちが、自分たちのストレスを表現するにはタイムラグがあることは、大きな災害の後などにもみられた傾向である³⁾。被災地や病弱教育などの取り組みを参考にしながら、子どもたちへの対応を考えていく必要がある。

Ⅲ. おわりに

病弱教育の場にたどり着かざるを得ない子どもたちとの関わりからは、社会の最先端の課題が見える。アレルギー、不登校、いじめ、発達障害、精神疾患、医療的ケア等々、これから子どもたちが向き合うことになる課題を早く受け取ってしまうことになった子どもたちとの出会いがある場である。今回の COVID-19 についても、マスクや手洗いを励行する、人と距離を

取らなければならない、学校を休まなければならない、などの状況にある子どもたちは今までもいたし、コロナ禍の状況が落ち着いた後もいるのである。

教師や学校は、学校休校中の際、一人ひとりの子どもたちに学びを届けるために、さまざまな工夫・実践を行った。お手紙やプリントを各家庭のポストに投函したり、メールや電話で連絡を取ったり、オンラインで授業の動画を配信したり、双方向のやりとりができるコンテンツを使って授業を行った。これらは、病弱教育を担ってきた教師が今までも、病気療養児の教育を保障するために求めてきたことである。筆者はこれを機会に一人ひとりの子どものニーズに応じた教育が実現していく希望を持った。コロナ禍の現在はもちろん、コロナ禍が落ち着いた後も、一人ひとりの子どものニーズに応じた対応を続けていただきたい。

文 献

- 1) 滝川国芳. “病弱教育における ICT 活用. 独立行政法人教職員支援機構. 配布資料. 2020” https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/078_001.pdf (参照2020-12-18)
- 2) 山本悦代, 小林美智子. 入院が子どもに与える心理的影響とその対応. 奥山真紀子編. 病気を抱えた子どもと家族の心のケア. 東京: 日本小児医事出版社, 2007: 94-100.
- 3) 宮城県教育委員会. “震災後における子どもの心のケアのために. 2013” <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/130742.pdf> (参照2020-12-20)